

生命歯学部

日本歯科大学新聞

東京千代田区富士見
日本歯科大学新聞会
発行兼 中原 泉
編集人 偶数月末日
発行日 1部 10円
定価 (〒951-8580)
編集室 新潟市浜浦町1-8
新潟市 025 (267) 1500

号外

創立100周年の新紀元

学部等々の名称を変更

平成18年
4月より

歯科の意識改革を促す

本学（中原理事長・学長）はこのたび、両歯学部の学部名を「生命歯学部」「新潟生命歯学部」、および大学院の両研究科を「生命歯学研究科」「新潟生命歯学研究科」に名称変更する。

歯科は、明治以降一〇〇年間にわたって、歯という名称ゆえに、患者国民から必要以上に小さい軽い存在として見られてきた。本学は、この患者国民の先入観と誤解を払拭するため、現行の歯科医学・歯科医療の実情にそぐわない名称を、生命科学のレベルに相応しいネーミングに変更すべきであると考へた。昨年七月、法人理事会は学部等の名称変更について機関決定し、同月より文科省と折衝を重ねてきた。

文科省は当初、どうもしっくりこない等と懐疑的であったが、本学は、歯は歯肉・歯槽骨・顎骨・口腔周囲組織内に植立する器官であり、歯のみに限局した学問・医療ではないとして、「歯科医学は生命体を学ぶ学問」であり、「歯科医療は生命体への医行為」であることを主張した。その結果、本学に賛同して同一行動を取ってきた大阪歯科大学と共に、本年一月中旬に文科省の承認を得た。

そこで、両学部の教授会、大学院の両研究科委員会に諮り、医学部もどきであるという反対意見もあったが、両教授会と両委員会の承認を得た。同じく四月末までに、校友会本部理事会の校友代表、および全在学生会に、次年度より「生命」という究極の二字を冠することを周知した。

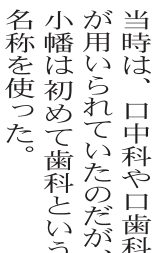
なぜ「生命歯学」なのか

西洋流歯科医療を修めた小幡英之助は、明治八年に東京医学学校（東京大学の前身）に歯科試験を申請し、わが国の歯科の開業免状第一号を受けた。

そのため患者国民に、歯科医師は歯だけを治療する医者という誤解されたイメージが定着し、医学・医療の一翼を担いながら、歯科は必要以上に小さな軽い存在として見

に及ぶ激痛に襲われて七転八倒した。私は今さらながら、歯科はやはり歯科ではない、と実感しただけではない、と実感した。この歯に限局した名称に一〇〇年間にわたって悩まされてきた負の遺産は、この辺で拭き取らねばならないと思つた。近年、高度福祉の時代

生命体を学ぶ歯学部



当時は、口中科や口腔科が用いられていたのだが、小幡は初めて歯科という名称を使った。

なされてきた感はあるが、い。あくまで、歯は、歯肉・歯槽骨・顎骨・口腔周囲組織内に植立する器官である。私は昨年暮、上顎大臼歯の歯周炎が歯槽骨炎から歯性上顎洞炎に波及し、歯から眼下、頭部

を迎えて、患者国民が生涯を通して歯・口腔を保つ、健康な生活を営むという生活の質QOLの向上が求められている。とりわけ、口腔と全身の関連性が注目され、ムシ歯や歯周病は、糖尿病、動脈硬化、心臓病など全

また、高齢社会においては、高齢者や合併症をもつ病者の歯科受診率が年々増加し、それに伴って救急症例の発生する確率が高まっている。そのため歯科医師には、治療前後や治療時の全身状況の把握と偶発症への早

なかでも、栄養の維持により高齢者の免疫力を強化すること、誤嚥の防止により誤嚥性肺炎などの気道感染の予防をすること等、その重要性が認識されてきている。

大方の患者国民は、歯科医師が死亡診断書を作

成・交付できることを知らない。私も生命体は死によって消失し、死亡診断書はその人の死を証明する。この死亡診断書による人の死の証明は、医師と歯科医師のみに与えられた至上の任務である。このたび、日本歯科大学は、歯科医学・歯科医療の実体にそぐわない歯学部という学部の名称を、現行の生命科学のレベルに相応しいネーミングとして、『生命歯学部』に名称変更することにした。これにより、「歯科医学は生命体に関する学問であること」、また「歯科医療は生命体への医行為であること」をご理解いただければ幸いである。

学長 中原 泉